

1920年代の浅草における大衆文化

—浅草オペラから 浅草レヴュウへの変遷—

杉山千鶴

〔研究目的〕

大衆には縁遠い高尚芸術であったオペラが変形し、浅草に進出して大衆文化に根付いた浅草オペラは、地方人の憧憬的となり流行したが、1923（大12）年9月1日の関東大震災で大打撃を受け壊滅する。その残党は1929（昭4）年7月カジノ・フォーリー公演で再び旗揚げし、ここに浅草レヴュウが始まるが、浅草オペラ壊滅後の浅草では女剣劇や安来節が流行した他に浅草オペラと浅草レヴュウをつなぐ役割を果たすものの存在が予想できる。本研究ではそれが何であるか、関東大震災以後壊滅していく浅草オペラを追い、その後浅草で行われた類似のものを資料に求めて明らかにし、浅草オペラから浅草レヴュウまでの一つの流れとして考察する。

〔研究方法〕

文献（文献一覧参照）及び都新聞東京版1923（大12）年9月1日—1929（昭4）年7月30日の遊覧案内欄、上演広告を用いた。（表1・2作成）

〔結果及び考察〕

1. 1920年代の日本

本研究において「1920年代」という設定をしたのは、世界的な同時代性が見られ、又日本でも浅草オペラから浅草レヴュウという変遷が1920年代の一現象として認められているからである。本研究では海野弘¹⁾に従い、1920年代を1918（大7）年から1932（昭7）年までの期間とした。

1918（大7）年第一次世界大戦が終結すると日本は戦時特需の繁栄をするが、ヨーロッパ諸国が復興し再びアジアへ進出すると、1919（大8）年貿易が輸入超過に転じたのを皮切りに一気に不況に陥り、失業者の増大・それに伴う労働・小作争議の頻発・一家心中の激増等の社会不安が醸成され、又1917（大6）年のロシア革命の影響で社会運動全般にマルクス主義が流行した。一方文化面では1920年代は南博が「日本モダニズム」と呼ぶ近代化の時期に含まれる。²⁾ エロ・グロ・ナンセンスの三語に象徴された、頹廢的・感覚的・刹那的な西洋憧憬が娯楽において顕著に窺われたものである。同時期文化の各方面において既存ブルジョア文化と新興プロレタリア文化が反発・浸食し合い大衆化が進んでいる。³⁾ 即ち1920年代の日本では大衆が目前の社会不安から逃避すべく西洋を憧憬の対象に据え、独自の文化を形成したのであ

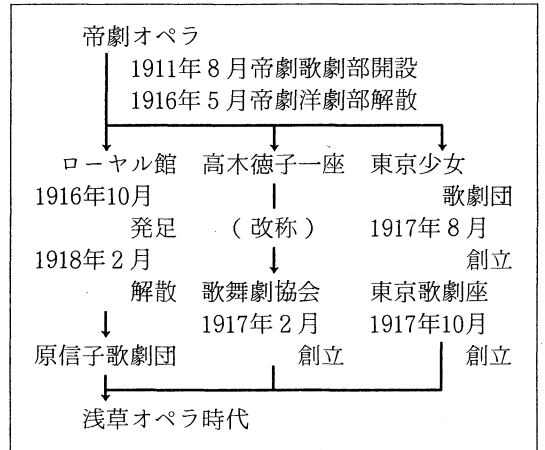
る。特に浅草は工場労働者街の本所と深川を後背地とする為、都市雇用者階層が多く⁴⁾、彼らが浅草の大衆文化を支えたのである。

2. 浅草オペラから浅草レヴュウへの変遷

(1) 浅草オペラの壊滅まで

1911（明44）年8月帝劇に歌劇部が設置されて帝劇オペラが始まり、浅草オペラはその流れを受けている（図1参照）。

図1 浅草オペラの源流



帝劇やローヤル館では受容されなかったオペラも、浅草式に変形即ち低俗化し安価で紹介された為支持され、大衆にオペラに代表される西欧文化に接する機会を与えたという点に浅草オペラの意義がある。その浅草オペラは

- ① ローシー直系のオペレッタ
- ② 高木徳子、伊庭孝、佐々紅華によるアメリカ式ミュージカル風創作オペラ
- ③ 益田太郎冠者によるナンセンス・コメディ
- ④ グランド・オペラ

の四要素から成る。1918（大7）年秋・冬と1920（大9）年秋～翌年にかけての2度最盛期を迎えたが同時に衰退もしており、関東大震災で大打撃を受けた後は一時的な盛り返しがあるものの、震災以前の演目の再演にとどまり（表1参照）、マンネリ化が進む。浅草オペラの壊滅時期は関東大震災とする説⁵⁾、1925（大14）年10月三団結合大歌劇団公演とする説⁶⁾等があるが、今回用いた資料によれば、歌劇団単独では1927（昭2）年8月の更生歌劇団公演が、他の芸能と一緒に場合は同年10月の歌劇民衆座となる（表2参照）。壊滅の要因は興行中心主義・マンネリ化等浅草オペラ自体の問題点の他に新興の剣劇・民謡・映画の台頭が考えられる。

(2) 浅草レヴュウの始まり

1929（昭4）年7月水族館付属演芸場で浅草オペラの残党がカジノ・フォーリーを旗揚げし、こ

表1 関東大震災以後の浅草オペラの上演演目BEST 5 とその初演

順位	演目	日数	類別	作者	初演
1	カルメン	87	大歌劇	ビゼー	1922(大11)年3月根岸歌劇団・金竜館
2	カフェーの夜	83	オペレット	佐々紅華	1917(大6)年10月東京歌劇団・日本館
3	マスコッテ	64	喜歌劇	オードラン	1913(大2)年9月帝劇公演
4	古城の鐘	46	喜歌劇	プランケット	1915(大4)年3月帝劇公演
5	新家庭 嘘	38	オペレット	佐々紅華	1921(大10)年10月民衆歌舞劇団・早稲田劇場
		38	オペレット	佐々紅華	1919(大8)年3月アサヒ歌劇団・日本館

註) 都新聞東京版(1923年9月1日~1929年7月31日)の遊覧案内欄・公演広告より、上演演目に関し上演1日につき1ポイントとして集計し、特に浅草で高いもの5作品を取り上げた。初演は日本人によるものとした。

れよりエロ・レヴュウと言われる浅草レヴュウが始まる。スピーディな展開、リズムカルな舞台意匠、レヴュウという西欧の名称が大衆を大いに魅了した。浅草レヴュウは次の三要素から成る。

- ①風刺性を伴ったコメディ
- ②ミュージカル
- ③エロチシズム

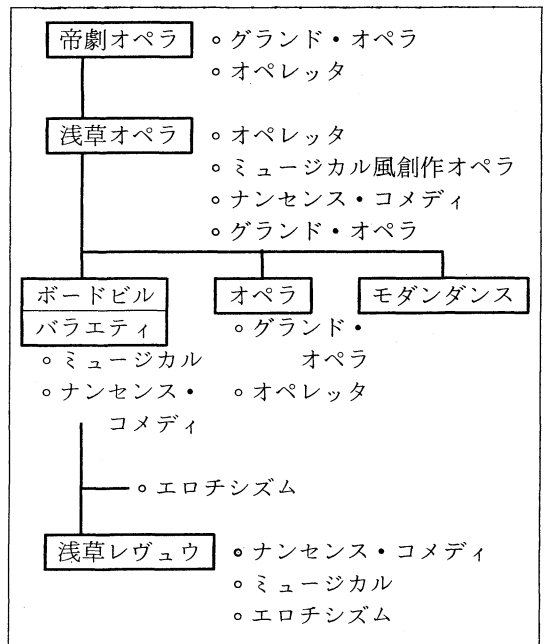
(3) 浅草オペラから浅草レヴュウへの変遷

浅草オペラの衰退と同時に逆に隆盛した映画は当時は無声映画でオーケストラが伴奏し休憩奏楽も盛んな為に演奏技術のレベルが向上し、ミュージカル風な作品の実演も可能な状態だった。こうした背景のもとに映画館でアトラクショナルな演し物が行われるようになり(表2参照)、それは既に浅草オペラでも演目の一部だったボードビルやバラエティと呼ばれるものと同様のものであった。そして電気館レヴュウのハダカダンスが観客を大いに喜ばせると、エロチシズムという要素が加わるのである。

浅草オペラの担い手達は壊滅後、藤原義江らがオペラへ、石井漠らがモダンダンスへと分散し、残りが浅草オペラ全盛期の再現を夢見て映画館へと集まった点、並びに浅草オペラのもつ四要素のうちボードビルとバラエティが引いた二要素に新たに加わったエロチシズムの計三要素が浅草レヴュウの要素となっている点から、映画館で上演されたボードビルやバラエティが浅草オペラと浅草

レヴュウをつなぐ役割を果たしていると言えよう(図2参照)。更に映画館でアトラクショナルに上演されたボードビルやバラエティが独立して浅草レヴュウになったことは、電気館レヴュウの解散後、水族館へと流れたことからわかる。

図2 帝劇オペラから浅草レヴュウへの流れ



〈主要参考・引用文献〉

1) 「モダン都市東京」海野弘 中央公論社 1983 pp10~11
 2) 「日本モダニズムの研究」南博 ブレーン出版 1982 pp7~8
 3) 「都市大衆文化の成立」平井正編 有斐閣選書 1983 p201
 4) 「浅草六区はいつもモダンだった」雑喉潤 朝日新聞社 1984 pp68~69
 5) 「娯楽の戦前史」石川弘義 東書選書 1981 p86
 6) 「日本のオペラ」増井敬二 民音音楽資料館 1984 p4 28
 「浅草底流記」添田啞蟬坊 刀水書房 1930
 「新版大東京案内」今和次郎 批評社 1933
 「浅草」高見順編 英宝社 1955
 「浅草オペラ的生活」内山惣十郎 雄山閣 1967
 「モダンダンス出航」日下四郎 木耳社 1976

註」都新聞東京版「1923年9月1日より1929年7月31日の遊覧案内欄及び公演広告よりオペラ、楽劇、レビュー、アトラクション、ボードビル、バラエティ、ミュージカルの7語を用いているものをすべて抜粋、作成した。